

TV会議を利用した事前交流の障害児への影響

Influence of the handicapped child on prior intercourse using the TV conference

小栗 信* 江田 裕介**

Makoto OGURI Yusuke EDA

(*和歌山大学教育学部附属養護学校, **和歌山大学教育学部)

要旨：平成11年11月、和歌山県海草郡M中学校1年生徒と和歌山大学教育学部附属養護学校中学部生徒の交流が行われた。その経過で、養護学校中学部1年男子生徒4名に対して意識調査を行い、TV会議がもたらす効果について検討した。意識調査は、障害児の交流相手に対する「能動性」「受動性」「消極性」を独自に作成した各4項目の質問を用いて調査した。調査はTV会議交流の前日とTV会議交流の直後の2回行い、それぞれ個別インタビューにより、「思う」「分からない」「思わない」の3件法で回答を求めた。能動性・受動性・消極性の各項目についてはそれぞれの回答に3点、2点、1点を与え得点化した。各得点の平均を分散分析により検定した結果、消極性に関して5%水準で有意差が見られ、交流の事後において消極的態度は低下した。消極性が低下した理由として、テレビ画面を通して話したことで、交流相手の生徒たちが「叱ったり」「悪口を言う」相手ではなく、自分に好意を持って接してくれる相手であることが分かり、不安が軽減したためと推測された。

キーワード：交流教育 知的障害児 ネットワーク

問 題

現在、障害のある子ども（障害児）と障害のない子ども（健常児）の交流教育は、教科における交流（教科交流）、学級行事もしくは学年・全校行事における交流（行事交流）、地域の学級間もしくは地域との交流（地域交流）に大別されている。

また、直接会って交流する以外にも間接的な交流として、図工・美術作品の交換展示や、交流の事前・事後に手紙やビデオの交換が行われている。さらに、学校におけるコンピュータやインターネットの普及を基盤に電子メール、電子会議室、TV会議システムを利用した交流も試みられている。

障害児と健常児の交流教育に関する研究は、健常児の障害児に対する態度に関するものが多く見られる（荒井1994、遠藤・山口1969、木船1986、田川・由良1992）。

次に障害児の意識や変容、障害児側の交流の評価に関して、小倉（1986）は、中学校の特殊学級生徒を対象として交流に対する反応を調査した。大谷（1999）は、養護学校小学部児童を対象に、社会的受容感について評価している。また、溝上（1990）は、交流学級担任交流に対して特殊学級の子どもの変容を調査した。田淵（1991）は、特殊学級担任に対して自閉症児の交流教育の実態調査を行っており、それぞれが交流教育に関した諸問題や課題を述べている。

次に、間接的な交流、その中で特に事前に行われる間接的な交流活動（事前交流）について言及したい。事前交流とは、実際に会って交流する前に手紙、電話、電子メール等で自己紹介をしたり、自分たちの学校や学級についての情報を交換する活動をいい、交流相手を理解したり、交流に対して積極的な態度を養うための活動である。

事前交流に関して、小栗(1999)は、障害児と交流する中学生を対象に事前交流の実施前と後に意識調査を行っており、事前交流は「障害児に対する態度に影響を与える可能性がある」としている。また、大谷(1999)は、交流に際した事前指導の中で、障害児の情報を提供しなかった1回目と、情報を提供した2回目の障害児に対する態度の調査を比較し、「児童が障害児を理解するために有効であった」と述べている。しかし、事前交流における障害児の意識や態度について言及した研究は見あたらない。

小栗(1999)や大谷(1999)の研究から、交流教育における相手の情報提供、相手をよく知るための事前交流は、相手に対する態度や意識に影響をもたらす、交流教育の中で有効な活動であると推測できる。しかし、交流教育の研究の中でも事前交流はその定義が確立されておらず、有効な方法も検討されていない。態度や意識に影響をもたらすことは分かっているが、どのような領域で影響をもたらすのか、非好意的な意識に関しての未調査など未開発な研究領域である。

和歌山大学附属養護学校の中学部・高等部では、交流学习の事前交流として、ホームページや電子メール、TV会議システムを利用して交流をしている。今回対象とした中学部と和歌山県海草郡M中学校との交流は20年の歴史があり、ホームページや電子メール、TV会議システムを利用したネットワーク交流は4年前より行われている。

今回のM中学校との交流では、事前交流として、ホームページを利用した自己紹介、班ごとのTV会議、実際の交流では、班ごとのミーティング、ゲートゴルフ、昼食、レクリエーションを行い、事後交流として電子メールの交換を行った。

目 的

障害児における事前交流の目的を、①交流する相手分かる、②交流学习に対する不安を解消する、③交流学习に対する積極的な態度を育むことの3つとし、障害児に対してインタビューによる意識調査を行い、TV会議システムによる事前交流がもたらす効果を明らかにする。

方 法

(1) 対象生徒

和歌山大学教育学部附属養護学校中学部1年に在籍する男子生徒4名(A,B,C,D)を調査の対象とした。それぞれの主たる障害、障害の程度は次の通りである。

A：ダウン症 療育手帳判定 A2

B：療育手帳判定 A2

C：療育手帳判定 B2

D：療育手帳判定 B1

交流の相手は、和歌山県海草郡M中学校1年生である。

(2) 評価の手続き

障害児の交流相手に対する能動性、受動性、消極性それぞれの領域を独自に作成した測定項目；能動性5項目、受動性4項目、消極性4項目を用いて調査した。

調査は、TV会議交流の前日（1999.11.11）と交流直後（1999.11.12）の2回行った。調査方法は、生徒個別インタビューにより、「思う」「分からない」「思わない」の3件法で回答を求め、それぞれの回答に3点、2点、1点を与えて得点化した。

項目の内容はTable1, Table2, Table3の通りである。

Table1 交流相手に対する能動性

No.	項 目
1.	M中学校の友達と会いたいと思う
2.	M中学校の友達と話したいと思う
3.	M中学校の友達と遊びたいと思う
4.	M中学校の友達といっしょにお弁当を食べたいと思う
5.	M中学校の友達の家に行きたいと思う

Table2 交流相手に対する受動性

No.	項 目
1.	M中学校の友達は優しくしてくれると思う
2.	M中学校の友達は分からないことを教えてくれると思う
3.	M中学校の友達は一緒に遊んでくれると思う
4.	M中学校の友達は困ったときに助けてくれると思う

Table3 交流相手に対する消極性

No.	項 目
1.	M中学校の友達は話しかけてくれないと思う
2.	M中学校の友達は遊んでくれないと思う
3.	M中学校の友達はまちがったら叱られると思う
4.	M中学校の友達は私の悪口を言うと思う

結 果

Table4 各領域個人別における事前事後の得点

	能動性	受動性	消極性
A事 前	13	10	8
事 後	15	12	6
B事 前	14	8	7
事 後	14	11	5
C事 前	10	9	5
事 後	12	11	4
D事 前	15	12	8
事 後	15	12	4

Table5 各領域の平均と標準偏差

	能動性		受動性		消極性	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
N	4	4	4	4	4	4
X	13	14	9.75	11.5	7	4.75
SD	1.87	1.22	1.48	0.50	1.22	0.83

Table6 能動性の分散分析

要因	平方和(SS)	自由度(df)	平均平方(MS)	F
条件	2	1	2	0.6n.s.
誤差	20	6	3.33	
全体	22	7		

Table7 受動性の分散分析

要因	平方和(SS)	自由度(df)	平均平方(MS)	F
条件	6.13	1	6.13	3.77n.s.
誤差	9.75	6	1.63	
全体	15.88	7		

Table8 消極性の分散分析

要因	平方和(SS)	自由度(df)	平均平方(MS)	F
条件	10.13	1	10.13	6.94 *
誤差	8.75	6	1.46	
全体	18.88	7		* p<.05

それぞれの平均を分散分析により検定した結果、消極性に関して5%水準で有意差が見られ、交流の事後において消極性が低下した。

他の項目に関して、有意な差は認められなかった。数値に若干の増加は見られるが、今回の調査では対象者が限られていたため変化の傾向を確認できなかった。

次に、有意差が見られた消極性に関して、それぞれの項目別の得点の推移を分析した。

Table9で示したように、特にNo.3の項目において、事前と事後での消極性の変化が顕著であった。

Table9 消極性の項目別における事前事後の得点

		No.1	No.2	No.3	No.4
A事	前	1	1	3	3
	後	1	1	3	1
B事	前	2	1	3	1
	後	1	1	2	1
C事	前	1	1	2	1
	後	1	1	1	1
D事	前	1	1	3	3
	後	1	1	1	1

考 察

養護学校の障害児は、健常児との交流に際し、「まちがったら叱られる」「悪口を言う」かもしれないという消極性を抱えていた。しかしTV会議を利用した事前交流を行うことで、消極性が低下することが分かった。

前述の小倉も中学校特殊学級生徒の「交流拒否反応」、交流に対しての消極的な感情があることを指摘している。生徒は交流が嫌いな理由として「意地悪されるから」と訴えており、これは、本研究の消極性の項目「悪口を言うと思う」と同列の感情であると考えられる。また、小倉は「意地悪されるから」の中身を「能力から言えば難しいことを要求される結果になることもある」と推測している。この点に関して、本研究の対象となった生徒も要求されたことができないと「まちがったら叱られる」という感情を持っていたと考えられる。

消極性が低下した理由として考えられるのは、事前交流をして相手とテレビ画面を通して話したことで、「叱ったり」「悪口を言う」ような相手ではなく、自分に好意を持って接してくれる相手であることが分かり、不安が軽減されたと考えられる。

能動性において、得点の増加は見られたものの、事前と事後では有意な差は認められなかった。このことに関してTable4,5より、事前から能動性の得点が高く、積極的に交流しようとする意欲が十分高まっていたと推測できる。

参考文献

- 荒井英俊(1994)：交流教育が健常児の障害児に対する態度に及ぼす影響,上越教育大学大学院教育研究科 障害児教育専攻 修士論文抄録,10,4-7.
- 位頭義仁(1997)：我が国における交流教育の現状と課題,発達障害研究,19(1),12-19.
- 遠藤 真・山口洋史(1969)：精神薄弱児に対する態度の研究,特殊教育学研究,6(2),19-27.
- 大谷博俊・貴志年秀・前川知子(1999)：交流教育における障害児に対する健常児の態度及び障害児の自己評価の分析—情報提供を事前指導に行った交流活動の試みを中心に—和歌山大学教育学部紀要 教育科学,49,219-225.
- 小倉純子(1986)：交流学習のかかえる問題点とそれへの取り組み—交流,好きじゃない—,発達の遅れと教育,341,24-29.
- 小栗 信(1999)：ネットワークを利用した交流学習の影響—美里中学校との交流を通して—,和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要,9,29-35.
- 木船憲幸(1986)：精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験の関係,特殊教育学研究,24(1),11-19.
- 田川元康・由良妙子：障害児に対する小学生の態度形成—統合教育・交流教育の影響—,和歌山大学教育学部紀要 教育科学,41(1),1-16
- 田淵 優・高橋泰子(1991)：自閉症児の交流教育の実際と諸問題に関する研究,武庫川女子大学紀要(人文・社会科学),39,25-32.
- 溝上 脩：交流教育の現状と問題点—小学校・中学校における特殊学級の場合—,佐賀大学教育学部研究論文集,39(1-2),63-89